

チェストの世界—身体的場の原型としての箱

山口 恵里子

はじめに

ギリシアの映画監督テオ・アンゲロプロスの代表作『旅芸人の記録』(1975)は、第二次大戦後の内戦がつづくギリシアを巡業してあるく旅芸人の一座を撮った作品である。座員たちは、ギリシア語でパウロとよばれる木製の直方体の箱を抱えて巡業地におもむく。箱には舞台衣裳や小道具が入っている。銃声かとどろくなか座員たちは逃げまどいながらも重たいパウロを手放そうとはしない。パウロは、旅する者たちにつきしたが、かれらを守る護符的な箱でもあった。

このような櫃を、英語ではチェスト(chest)、フランス語ではコッフル(coffre)とよぶ。¹

ギリシアの旅芸人のように、中世のヨーロッパは人びとがつねに旅支度をととのえていた時代だった。地域の経済的自立を原則としたなかで、王侯貴族で

¹ チェストの語源は、小枝で編んだバスケットを意味するギリシア語の κίστη である。それがラテン語で cista となり、小枝などでできた箱を意味するようになった。cista が聖なるものを入れる容器、また投票箱の意味でも用いられてもいたことから、cista は蓋をそなえた箱であって、バスケットのような口のあいた器ではなかったことが推測される。

Cista が cest, ciste という語形で英語に入ったのは8世紀初めである。Cest, ciste は chest となり、主として収納や保管のための箱を意味するようになった。バスケットを表わす語としては、ラテン語の bascauda を継いだフランス語の bascho(u)e, bâchet が13世紀に英語に入り、basket, bascat, baskot と綴られて、柳や小枝、葦でできた籠を表わすようになった。

Case は box と chest をふくんだ箱全般を指す語として用いられたが、そのさいとくに case は中に納める物に適した容器という意が含まれている。それは case がラテン語の捕まえる (catch, seize, hold) という意味の動詞"capere"から派生した容器を表す語 capsa をもとにするからである。Box, chest は容器として作られ、それにふさわしい物を入れるのだが、case の場合、はじめに物があり、それを「捕まえる」ためにふさわしい容器として case が作られたことになる。Capsa はフランス語で chasse となり、それが14世紀に英語に入り case となった。

Coffer はギリシア語の κόφινος(バスケット) から派生したラテン語の cophinus からできた語である。Cophinus は大きいバスケットや食べ物などを入れる蓋つきの詰めかごのことをいった。これがフランス語で cof(f)re と変化し、英語に入った。英語では14世紀にとくに金や貴重品を入れる丈夫な箱を指して coffer が用いられるようになった。柩を意味する coffin も同族の語である。なお、本稿のギリシア語の表記については、筑波大学文芸言語学系の秋山学氏がご教示くださった。この場をかりて感謝申し上げます。

さえもあちこちにある領地のあいだを季節的に移動したが、そのさい衣類、武器、家宝などの家財道具のすべてを入れて運搬した収納具がチェストであった。移動生活においては、かさばる家具は不要であり、運搬可能な小型の家具、折りたたみ式や組み立て式の家具が製作された。なかでも収納具にも坐具や寝具にもそしてテーブルにもなる万能の家具チェストが中世家具の主役となったのである。

フランスのアンリ5世の財産目録では *coffre* をダースで数えていたように、中世の王はコッフル、チェストを多量に所有していた。² ふつうの収納具として使用されるチェストは、質素で規格化されたものであり、人びとは必要に応じてそれを購入するか、³ 木の幹をくりぬき、あるいは板を組み合わせてチェストをつくった。箱をつくる指物師は、イギリスでは *arkwright*、フランスでは *menuisier* とよばれ、職人のなかでも高い地位にあり、かれらの取引は法令によって保護されていた。⁴

チェストやコッフルの活躍は中世以降も変わらなかった。中部フランスのマコネ地方の農村では19世紀前半までコッフルが収納具の中心であり、なかには衣類、皿、宝石などの貴重品がしまわれ、20世紀になってからは小麦の保存に役だてられたという。⁵ チェスト、コッフルはしだいに中に入れられる物によって洋服ダンスやカップボード、引き出しつきのコモードなどと形と名称を変えて発展していったように、ヨーロッパのほとんどの家具の原型はこの箱にあるとあってよい。

椅子も例外ではない。中世には、三本脚のスツールに背当てがついただけの単純な椅子と、背もたれが高くのび、天蓋でおおわれた、あたかも箱が縦に立てられたかのような椅子という二系統の椅子がみられたが、後者の角張った椅

² Maurice Rheims, "Histoire du mobilier," *Histoire des mœurs; Encyclopédie de la Pléiade*, éd. Jean Poirier (Paris: Éditions Gallimard, 1990) 1074-1165.

³ S・ギーディオン『機械化の文化史—ものいわぬものの歴史』榮久庵祥二訳（鹿島出版会, 1977）268.

⁴ "Légendes et curiosité des métiers; Les Menuisiers," *Histoire des mœurs; Encyclopédie de la Pléiade*, éd. Jean Poirier (Paris: Éditions Gallimard, 1990) 20-31. Molly Harrison, *People and Furniture: A Social Background to the English Home* (London: Ernest Benn Ltd., 1971) 1

⁵ Suzanne Tardieu, *La vie domestique dans le Mâconnais rural préindustriel* (Institut d'Ethnologie, Musée de l'homme, 1964).

子はチェストから生まれたといわれる。⁶

そのような椅子はまず、教会の聖歌隊席(choir)にすえつけられた。イタリアのペルージャの聖ペトロ聖堂に残る1526年から9年の歳月をかけてつくられた聖歌隊席を調べたところ、席は二重になっており、後部の席のパネルには高く伸びた天蓋がつけられ、背当ての後ろは物を収納できるチェスト構造となっていた(図1)。ひじ掛けには個々にことなる動物や魚などの丸彫りがほどこ

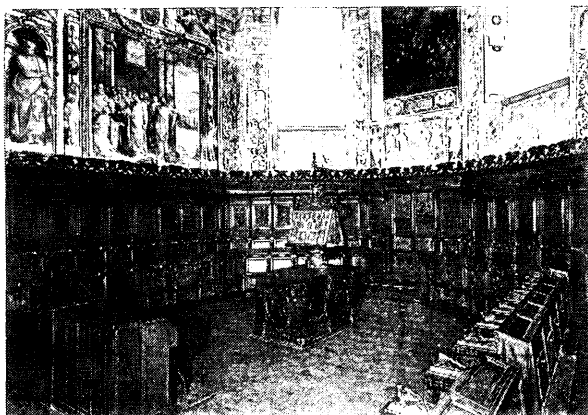


図1 聖歌隊席(1535) 聖ペトロ聖堂、ペルージャ、イタリア

され、側板、背当て、天蓋もそれぞれ意匠を凝らした木彫りの彫刻で装飾されている。前部の席の背当ては幅広であり、そのうえにものを置くことができる。天蓋の上部には透かし彫りがあり、それが聖歌隊席全体をとりかこむ。チェストが連ねられることによって、聖堂のなかに特別な場が出現しているのがある。

しかし、このような椅子が上流階級の家にあられるのは1490年頃であり、それ以前、そして個別の椅子があらわれたあとも、人びとは壁際に直列におかれたチェストのうえにすわった。かれらの日常生活はチェストの周辺に濃縮されていたのだ。また、後述するように、中世では可視的な物質はすべてなんらかの象徴性をともない、不可視のもの、永遠なるものと関連づけられて解釈されたことを想起すれば、あらゆる物をおさめたチェストは象徴に満ちた呪

⁶ 鍵和田務『椅子のフォークロア』(柴田書店, 1977) 101.

術的収納具としての性格を担っていたといえる。

このようなチェストの世界とはどのようなものであり、そのうえにすわる中世人の身体はどのようなトポスを経験していたのか。本稿では、このチェストの箱空間と身体とのかかわりを検証していく。

チェストと女の内部空間

チェストのような方形の箱が発達する以前は、布や皮の荷袋が収納具として用いられた。袋は木箱にくらべて軽く、敵から逃げるときや移動するときに、家財の収納運搬に適していたからである。安定した住居に居を構えるようになり、家財道具や武器が増えると、それらをおさめられるだけの大きさと頑丈さをそなえた容れ物が必要となり、荷袋は長箱式の収納具へと発展した。

定住がすすんだ古代ギリシアではすでに袋や瓶とならんでチェストが使用されていた。限られた家具のなかで主要な役割をはたしたチェストは、ギリシア神話のなかにも登場する。

アクリシオス王は、孫が自分を殺害するという神託を恐れ、娘ダナエを地下牢に幽閉するが、黄金の雨となって侵入したゼウスと交わったダナエとその子であるペルセウスをチェストに入れ、海に投じる。古代ギリシアにおける容器のイコノロジーを分析したフランソワ・リサラグは、このチェストは室内に拘束される女を象徴するとともに、父の家からの排除すなわち結婚をあらわし、さらに柩の意を含蓄すると指摘している。⁷ また、女神アテナがヘファイストスの子で大地から生まれたエリクトニオスを隠したのもチェスト（バスケット）のなかだった。開けることを禁じられていたその箱の蓋が娘たちの手によって開けられ、英雄が誕生したのである。

古代ギリシアにおける箱やチェストのメタファーは多様性にとむが、リサラグによれば、それらは女のスペース、すなわち女たちがとどめおかれた屋内の私的空間、さらに女の身体と本質的な関連をもつ。⁸ 女たちが屋内にとどまっているのか、あるいは屋外に出ようとするのかが、箱の蓋と家の扉の開閉によってイコノジカルに表わされたが、これが有効だったのは、チェストやバ

⁷ François Lissarrague, "Women, Boxes, Containers: Some Signs and Metaphors," trans. by Eric Brulotte, *Pandora: Women in Classical Greece*, ed. Ellen D. Reeder (Princeton: Princeton UP, 1995) 92.

⁸ François Lissarrague 93.

スケルトなどの容器が、女の領域とされる台所や倉庫などの屋内スペースにおかれたからである。その空間の収納、保存、貯蔵という属性がまた、箱のメタファーをとおして、室内に閉じ込められ、家事にいそむ女のイメージに重ねられた。じっさい、女たちの一生の重要なモーメントには、チェストやバスケット、箱が用意されたのだった。結婚の行列では、さまざまな箱がはこばれ、女性が死ぬと、チェストやバスケットをかたどった墓がしばしばつくられた。⁹

けれども、こうした女と箱の密接な関係性は、古代、そしてギリシアに限ったことではない。¹⁰ ギリシアの女たちは近年まで、美しい刺繍をほどこしたりネン類などの嫁入り道具をチェスト（パウロ）につめて夫となる人の家に嫁いだ。チェストには木彫りの装飾がほどこされ、蓋には結婚の年とイニシャルが刻まれた。わたしが人類学的調査をしている北ギリシアの山村のたいていの家の玄関ホールには、百年以上も前につくられたチェストがおかれている。現在よりも女性の地位が低く、嫁いだ家では母親となるまで嫁としての存在価値を認められなかった当時において、チェストは嫁の所有物としてみなされた。町で箱をつくる職人に話を聞いたところ、いまでも嫁入り道具としてのチェストの注文がはいるという。

このような女と容器のメタファーをもっとも端的にそなえている神話上の女はパンドラであろう。パンドラの持つ容器といえば、ほとんどの人が小さな方形の箱をおもいうかべるだろうが、ヘシオドスのギリシア古典の記述においてはパンドラが開けた容器は箱ではなく、ピトス（πίθος）とよばれる巨大な陶製の瓶であった。ピトスは、ブドウ酒やオリーブ油、食料の保存用の器や椀の代わりとしてもちいられた据えつけの容器である。古代ギリシアでは壺や容器の部分部分が人間の、とりわけ女の身体になぞらえられ、それぞれ口

⁹ François Lissarrague 96-97.

¹⁰ フランスでもチェストは19世紀まで嫁入り道具として婚家に運ばれた。20世紀初頭のブルターニュの農村で生まれ育ったピエール＝ジャック・エリアスによると、その頃にはチェストから発達したカップボードが結婚の祝いとして贈られるようになった。カップボードをつくった大工が一張羅を着込み、贈り物を馬車の荷台に乗せて誇らし気に夫婦の家の寝室に運ぶと、人びとがいっせいにそのカップボードにふれて祝福したという。エリアスの母親のカップボードはくりの木で作られた、真鍮の留め具がついた二層式のものだった。なかには、聖人の生涯について記した貴重な本や銀貨や銅貨、宝物もしまわれていた。Pierre-Jakez Hélias, *Le cheval d'orgueil* (Paris: Librairie Plon, 1975); *The Horse of Pride: Life in a Breton Village*, translated and abridged by June Guicharmaud (New Haven: Yale UP, 1978) 28, 96, 118, 271-272.

(στόμα)、首(αὐχὴν)、腹(γαστήρ)とよばれたことをふまえ、パンドラが口を開けるピトスは彼女の身体のイメージそのものであると論じられてきた。¹¹

ゼウスがエピメテウスに贈ったパンドラは、地上で暮らすうちにピトスを開けてしまう。この行為によって、世界の諸悪がまき散らされ、人類の黄金時代に終焉がもたらされた。男は労働の苦しみを、女は出産の痛みを背負い、また男女ともそれに疲弊し、死を迎えねばならなくなったとされる。¹² ピトスの底に唯一のこったのは希望である。この希望が、これからの生命、出産を予期させるものと指摘され、またピトスの腹が受胎する子宮に重ねられるように、¹³ 女の身体は内部空間を有する容器であり、ピトス、チェストは、生命の誕生と死のイメージを内包する容器としてみなされた。じっさい、それらの容器には、遺骨や死んだ赤ん坊が入れられたという。¹⁴ サミュエル・ベケットは人の出生を「墓にまたがっての難産」¹⁵ といったが、ピトスとチェストはその形のうちに生と死を同時に証言しているのだ。

パンドラの箱—内部から外部へ

しかし、女の身体と容器が内部から外部へと空間を移動したとき、古代ギリシアのイコノロジーをもちいていえば容器の蓋が開けられたとき、世界はあら

¹¹ From I. Zeitlin, "The Economics of Hesiod's Pandora," *Pandora: Women in Classical Greece*, ed. Ellen D. Reeder (Princeton: Princeton UP, 1995) 53.

¹² パンドラ神話そのものも、女は管理され、公共の場から隔離されなければならないという社会通念をふくんでいる。この通念は現在も、ギリシアをはじめとする地中海地域にみられるものである。松村一男『女神の神話学—処女母神の誕生』(平凡社, 1999) 242-243.

ヘシオドス以前のこの物語のあるヴァリエントでは、ピトスは二つあり、ひとつには善(kalon)が、もうひとつには悪(kakon)がはいており、それらピトスをもつのは男か女であり、人間に選択がまかされていたのであるが、ヘシオドスの時代になると、二つのピトスが一つとなり、そのなかの「美しい悪(Kalon kakon)」をパンドラが開けてしまうという話になった。それによって最初の女が、この世にあらゆる種類の禍いをもたらしたというストーリーが強調されるようになった。この話が知られるようになると、キリスト教の教父たちは、蓋を開けたパンドラと果実を食べたイブを重ね合わせた(ジョン・A・フィリップス『イブ/その理念の歴史』小池和子訳(勁草書房, 1987) 39-51.)。

¹³ *Pandora: Women in Classical Greece*, ed. Ellen D. Reeder (Princeton: Princeton UP, 1995) 196.

¹⁴ *ibid.*, 196.

¹⁵ Samuel Beckett, *Waiting for Godot* (NY: Grove Press, 1954), Act. II, 57 & 58. "They give birth astride of a grave...." "Astride of a grave and a difficult birth."

たな位相をみせはじめ。中世が終わりをむかえ、近代の幕があがろうとするとき、パンドラは、巨大な固定されたピトスではなく、運搬可能な小型の箱を手にして地上に姿をあらわしたのである。

この変化は、エラスムスが『三千の格言』（初版1508年）でパンドラの容器を書き換えられない書き間違いをしたことによって生じたものである。これは美術史家パノフスキー夫妻の研究によってあきらかにされたのだが、エラスムスはパンドラがピュクシス (pyxis) とともにプロメテウスの許に送られたと記したのである。ピュクシスは古代ギリシアでは円筒形の容れ物をさしたが、エラスムスがもちいたラテン語では葉などを入れる小さい箱を意味した。これ以後、巨大な瓶ピトスは小さな携帯用の箱ピュクシスに形を変え、パンドラがその箱を地上に運んだという神話がヨーロッパ中に流布することになった。¹⁶ この背景に、当時のヨーロッパではピトスよりも箱のほうがより身近な容れ物でもあったことをおさえておく必要がある。

ほどなくして「パンドラの箱」(Pandora's box)という成句が海を超えた英語のなかにもあらわれ、箱の蓋を開けるという行為が禍いを招くことを連想させるようになった。¹⁷ 英語の box はラテン語の pyxis を語源とするが、後者が葉などを入れる容器であったのにたいして、box は通常蓋がついた方形の容器を意味した。ここから、パンドラのもつ容器のイメージはしだいに方形の箱として

¹⁶ パノフスキーは、エラスムスがパンドラの神話にプシュケの神話を意図的に混同させた可能性を指摘する。プシュケはウェヌスから命じられたとおりに冥府にいるペルセポネの美をピュクシスにつめて持ち帰る途中、中をみたいという誘惑に負けてしまう。するとピュクシスから煙霧が放出され、プシュケは気絶してしまうのである。ドラおよびエルヴィン・パノフスキー『パンドラの箱—神話の一象徴の変貌』阿天坊耀・塚田孝雄・福部信敏訳（美術出版社、1975）23-24。

¹⁷ 1530年代には、ピュクシスを手にするパンドラが最初に美術の画題として登場する。（ドラおよびエルヴィン・パノフスキー、31）英語における Pandora's box の初出は、1579 Gosson *Sch. Abuse* (Arb.) 44, I cannot lyken our affecton better than..to Pandoraes boxe, lift vppe the lidde, out flies the Deuill; shut it vp fast, it cannot hurt vs. (OED). ヨーロッパ各国で、パンドラの箱はつぎのような成句となっている。boîte de Pandore (仏), caja de Pandora (西), Pandoras ask (瑞典), doos van Pandora (蘭), Buchse der pandora (独) イタリア語では vaso di Pandora (パンドラの壺) というが、その点についてパノフスキーは、イタリアにはエラスムスの影響がアルプス以北の国々と比較してわずかにしかおよばなかったとしている。

ラテン語の pyxis はもともと、ギリシア語でツゲの木のことをいう πύξις を語源としている（ラテン語でツゲの木を意味する *buxus* は πύξις を直接ひきついだもの）。

収斂されていく。¹⁸ この移行は、エラスムスの書き換えによることばの変化を超え、ヨーロッパの空間認識の変容とふかかかかわっているようにおもわれる。

先にみたように、チェストなどの容器は、女とともにつねに内部空間にとどめおかれるもの、とどめおかれなければならないものだった。古代ギリシアの絵画表現で、蓋の開いた箱は、女が、すなわち内部にあるべきものが外部に出るという事態を表わしたように、パンドラとともに自在に空間を移動する箱は、境界を軽々ととびこえ、内部を象徴する箱を外部にあらわした。蓋がついた四角い箱 box は、球体のピトスよりも、内部にいつそう濃密な空間を生みだす。それゆえ、女の手によって蓋が開けられたとき、その内なる世界は外部をすっかりおおいつくしてしまったのだ。矩形の箱が空間を切りとるという感覚は、近代の空間認識と通底するものであるが、これについては別稿にゆずるとして、ここでは箱の内部が外部を包みこんでしまうという内と外の反転がおきていることが問題である。

このような、箱の内部に境界がなくなり内部が外部よりもおおきくなる事態

その語の $\mu\upsilon\sigma\acute{\iota}\varsigma$ と変化した形がラテン語に入り、pyxis と表記されるようになり、薬などを入れる小さい箱のことを指示した。そのいっぽうで pyxis は、俗ラテン語で buxis (対格 buxidem, その短縮形 buxem) と記され、buxum といえば、ツゲの木でできた容器を意味した。Buxum が英語に入ると、古英語では box と表記され、ラテン語の意味をひきついでツゲの木あるいはその木でできた容器をいったが、そのさい通常蓋のついた方形の容器をあらわすようになる。フランス語の箱を意味する boîte もラテン語から派生した古フランス語の boiste が形を変えたものである。また、buxum と変化した pyxis のままの語形も残り、英語では11世紀にその訳語として box があてられている。つまり、英語の box は buxis と pyxis の両方の意味をふくんで、とくに薬や軟膏、貴重品などを入れる蓋付きの箱のことを指すようになったのである。現在は大きな箱のことも box というが、その意味で box がもちいられたのは1700年頃になってことだった。Pyxis は pix という語形でも英語に入ったが、pix はミサのさいに聖別されたパンを入れる容器を指す教会用語にとどまった。

NATO がユーゴスラヴィアに空爆をはじめたとき、ギリシアの新聞に「パンドラの箱 $\kappa\omicron\upsilon\tau\acute{\iota}$ が開けられた」と書かれていたが(1998年3月)、ギリシアでも成句として $\kappa\omicron\upsilon\tau\acute{\iota}$ が使われているのは、エラスムス以降の表現の影響によるものだろう。その $\kappa\omicron\upsilon\tau\acute{\iota}$ は、郵便ポストや小包、缶ジュースの缶にも用いられ、箱がなにかを包むものという包括的な意味にひろがっている。

¹⁸ 20世紀になっても古代ギリシアのピトスの面影をとどめて、杯、丸薬入れ、女性のコンパクトなどのさまざまな形と大きさに姿を変えて表現されてもきた(ドラおよびエルヴィン・パノフスキー174)。また、英語の box が卑語で女性の膣をあらわすように、パンドラの箱が女性性器そのものを含意するようになった(ジョン・A・フィリップス 51.)。

を、ガストン・バシュラールはつぎのように書いている。

箱、とくにわれわれがもっと確実に所有している小箱は、ひらかれる事物である。小箱は、しめられると、ふたたび事物の共同体へかえされる。すなわちそれは外部空間のなかに位置する。だがそれはひらかれるものなのだ。(中略) 小箱がひらかれる瞬間から(中略) 外部は一気にけしきられ、すべてが新奇であり、驚愕であり、未知である。外部にはもはや意味はない。最高のパラドックスだ。すなわち新たな次元、内密の次元がひらかれたために、主体の次元は無意味になってしまった。¹⁹

箱の蓋は開かれるものである。そして、開かれると、それまで外在していた意味を消去してしまう。この前提は、箱が小さいものであればあるほどより確かなものとなってわたしたちのまえに「開け」という脅迫とともに迫りくることになるだろう。

バンドラの箱は、諸悪と希望が先にあり、それらを囲まなければならない箱だった。しかしそのいっぽうで、箱の蓋を閉じることによって内部が生じるばあいもあることもわたしたちは知っている。包むという行為には、「空間を含めて含む」、「空間を仕切る」という精神的ないとなみをしめす意味あいがあるように、²⁰ とりわけ空間は包むことによって、つまり箱の蓋をしめることによってはじめて、そこに包まれるべきものとして出現する。空間への不安と心地よさは、内部が先にあるのか、あるいは内部があとからつくりだされるのか、という包む行為の表裏のあいだにたちのぼってくる感覚なのだろう。なにかを隠す不安となにかに抱擁される心地よさ、なにかがあらわれでる恐怖となかにとどまりつづけたいという憧れが、包み包まれる、あるいは蓋を開け閉めするといういとなみのなかで生じる内部と外部のあいだで綾をなしている。

わたしたちがこれからみようとす中世の空間は、内部が包まれることによってあとから生じるという方向を志向する。中英語(Middle English)の space が二点間、二つの出来事のあいだの空間的、時間的な「間隔」を意味したよう

¹⁹ ガストン・バシュラール『空間の詩学』岩村行雄訳(思潮社, 1969) 124.

²⁰ 額田巖『包み』(法政大学出版局, 1977) 15-18.

に、中世では空間の輪郭づけが重視され、その内部は空洞とみなされた。²¹ 包まれることによってあらわれる、そのような中世の空間を境界づけたのが、チェストであった。

呪術的収納具としてのチェスト—内部と外部の反転

ヨーロッパ中世の家においてはチェストは、冒頭にふれたように、壁沿いに直列に並べられた。²² いつ襲われるやもしれぬ状態においては、壁から離れてすわると背後から刺客に刺される恐れがあり、また窓に近いほうが採光にもすぐれていたからであるが、²³ むしろここで注目したいのは、壁際に並んでおかれたチェストが、家の内と外を境界づけたことである。移動先でも壁際に置か

²¹ ボルノウは、ドイツ語の空間をもっとも包括的にあらわす語 *raum* を「空洞のこと、すなわち、人間を庇護するように收容し、人間がそのなかで自由に運動することができ、そしてそれ自身はこの空洞をとりまいてはいるが、しかしもはや空間とは言われないほかのものから区別されている空洞」であると論じた（オットー・フリードリッヒ・ボルノウ『人間と空間』大塚・池川・中村訳（せりか書房、1978）32-38）。その *raum* と同族の英語の *room*（中英語では *room*, *roume*, *rum* (e), *rom* (e), *romme*) は、二次元ないし三次元の広がりをもった空間を意味したが、この空間も周囲とは画された空間を含意していた。この意味がしだいに強調され、*room* は壁や仕切りで区切られた屋内の部屋をあらわすようになり、船室や牛舎などの部屋にたいしても *room* がもちいられた。その空間が *raum* と同様に空洞を意図したことは、動詞形 *roumen* が、胸 (*chest*) の締めつけ感やうっ血を取り除くこと、穴などを掘ること、えぐって作るなどの行為をしめして、人間の身体や土地のなかをくりぬくことを意味したことから探ることができる。身体空間、とりわけチェストとよばれた胸部の切迫感をとりのぞくことが心地よかったように、室内にしてもなんの圧迫感のない空間が中世の人びとにとって「快適」だったのである。換言すれば、身体空間は、*room* の箱空間と等価でありえたといえる。

²² このような家のようなすは、ルーマニアのブカレストにある *Village Museum* やマラムレシュの野外博物館に保存されている農家からうかがい知ることができる。ブカレストに移築された17世紀の *Vaslui* 地方の一室構造の家を調査したところ、たたきの床のサイズが 407cm × 377cm、天井までの高さが 170cm であった。出入り口がつくられた壁をのぞいた三方にベンチがあるほかは、高さが 38.5cm の木製のテーブルに、高さが 20cm ほどのスツールが4脚おかれているだけである。この家はチェストを購入する余裕がなく、住人はベンチに敷物をしいて寝たが、たいていの家ではチェストを購入し、それをベッドの脇や聖なる空間とされる炉の脇の壁にそって置き、部屋の中央を開けた。このようなチェストの配置位置は、20世紀につくられたルーマニアの農家でも変わらず、チェストは壁際で室内空間の境界を定める重要な箱となっている。

²³ Molly Harrison 17.

れたチェストは、空間を空間化し、「室内」を定位したのだった。その室内にはチェスト以外に家具はほとんどなく、がらんどろであった。チェストは、みずからが箱でありながら、内外の壁の輪郭線を強調して、室内を包んで、箱化したのである。

ここで、中世において世界はキリスト教をとおして、地上の国と神の国という二元性を呈するようになり、さらにネオプラトニズム的思想によって、地上のものは天上の原型の写しであり、象徴であるとかんがえられたことを想起したい。中世の空間概念は、彼岸にまで拡大されていたのであり、可視的な、物質的なものは、不可視のもの、叡智を象徴し、事物や出来事は永遠と関連づけられて解釈され、本質の世界は具体的な物をとおして姿をあらわした。このプロセスのなかで空間はそこにおかれた物の象徴性の密度によって階層づけられた。このような空間は、均質的でも抽象的でもなく、感覚によって知覚される、擬人化された空間なのであった。

この見解の根底には、中世史家のアーロン・グレーヴィチが指摘したように、「神によって創造された世界の中で中心的な位置が人間に属するという確信」があったことも忘れてはならない。²⁴ そうした世界はまず身体の尺度ではかられたが、そのさい人間は面積よりも容積を空間の基本概念としてもっていた。容積は、身体が知りうる「一杯」「空っぽ」というような感覚ではかかれたからである。身体はまさしく容器となって空間との最初のかかわりあいをもったのだった。²⁵ このような空間認識においては、自然環境は外からの客観的な観察の対象とはならず、人間の身体は自然と分化してはいなかった。身体はさらに自然を包括する宇宙と呼応し、マクロコスモスをうつつマイクロコスモスとして解されたのである。

このように具体的に、かつ象徴的に空間が表象され、自分固有の特質が自然に賦与される世界像において、グレーヴィチが論じるところによれば、「人は自分が所有し、自分のふるさととなっている空間の特定部分と自分との間に、内的なつながりがあると感じていた」²⁶ のであり、住まう土地や家はしたがって、きわめて濃密な空間となり、空間の階層的関連のうちに高位に位置づけら

²⁴ アーロン・グレーヴィチ『中世文化のカテゴリー』川端香男里・栗原成郎訳(岩波書店,1999)83.

²⁵ イーファー・トゥアン『空間の経験—身体から都市へ』山本浩訳 ちくま学芸文庫(筑摩書房,1993)87.

²⁶ アーロン・グレーヴィチ 108.

れる。家のなかのものや周囲にあるものはすべてなんらかの象徴をとめない、それが普遍的で妥当な真理に照合されるのである。

なかでも、あらゆる所有物をおさめたチェストは、より具体的な空間の「ふるさと」を内部に隠しもった。バシュラールは「家具をひらくと、ひとは住まいを発見する。家が小箱のなかにかくされている」といったが、²⁷ チェストは家、あるいは「ふるさと」、「住まう」場を内包するだけでなく、内部の物が永遠なる世界を象徴し、遠い世界を近くにひきよせる箱であった。箱は遠くて近い世界そのものだった。みえない内部はもはや境界をもたず、無限に、外部をかこむのである。

象徴概念は、濃密になればなるほど、具象から離れ、抽象化していくように、象徴に満ちたチェストの内部は、聖化され、神の国に近づいていくだろう。魔力が秘められていると信じられた家宝や珍奇な品、祭具などをおさめる特別なチェストが、室内の奥まったところにおかれ、家人を守護する役割をあたえられたのも、チェストの内部空間が神の国を写していたからである。そのようなチェストは、家内秩序や格式をしめす具ともなり、皮張り、木彫り、絵などで装飾がほどこされ、あるいは絵が立てられて、祭壇、聖櫃としてその場を聖別した。²⁸ そして、このようなチェストによって定位された室内もまた、チェストの大きく豊かで内密な内部が象徴する不可視の世界に開かれていくことになる。

包むという行為があってはじめて内部と外部が生じるように、チェストが室内を境界づけることによって、空間が仕切られ、包まれるべき内部空間がそこに現われる。家具の技術史を研究した S・ギーディオンが、「中世における快適さとは、人びととその生活をつつむ雰囲気のようなもの、中世における神の国のように、手ではふれることのできないものだった。中世の快適さは空間の快適さであった」と述べたように、²⁹ そんなふう包まれることによって生じる空間、それも包まれてはいてもその外部にひろがる永遠なる世界をうつす空間が、中世人にとっての「快適」な空間だったのである。

²⁷ ガストン・バシュラール 125.

²⁸ 山本祐弘『インテリアと家具の歴史 西洋篇』（相模書房、1978）38.

²⁹ S・ギーディオン 290.

「出来事」の舞台としてのチェスト

チェストは内部のみに濃密な空間をつくったのではない。テーブルにも寝具にも座具にもなったチェストは、周囲に人を集めて、その場を濃密にした。人びとの日常はこの場で営まれたのである。中英語のすわるという動詞 *sitten* は「住む」という時間的な蓄積を含意したが、³⁰ チェストは、その運動をうながす装置であり、中世人が世界とみずからの身体をかかわりづける手がかりあるいは基準とした座具であった。身体空間の最初の「ここ」は、この箱のうえにすわる身体の位置であり、それは箱が人びとをよびよせた場、すなわち内部が外在化し、外部を包みこむ場として出現する。身体はその箱に受動的によびよせられながら、すわるという行為によって能動的にその場、そして世界へとかかわっていくのだ。チェストが世界のなかに身体を位置づけたのである。

それゆえ、チェストは、「出来事」あるいは「^{アバンチュール}冒険」の舞台ともなりえた。

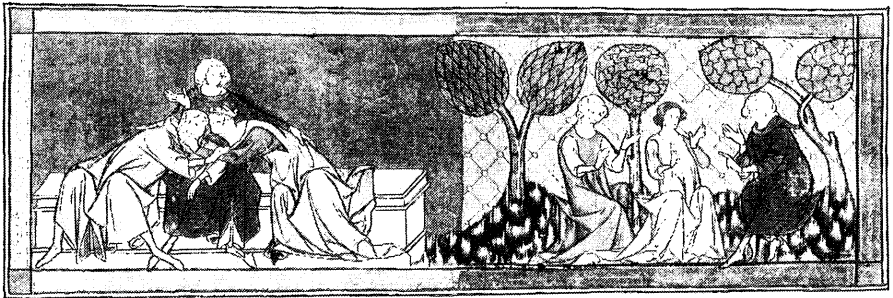


図2 ランスロとグィネヴィアの最初のロづけ

Lancelot du Lac, Pierpont Morgan Library (ニューヨーク) MS. M805-806, 67v, 14C.

Roger Sherman Loomis (in collaboration with Laura Hibbard Loomis), *Arthurian Legends in Medieval Art* (London: Oxford UP, 1938) 口絵.

³⁰ チョーサーの『カンタベリー物語』の騎士の話のなかに "In derknesse and horrible and strong prisoun/ Thise seven yeer hath seten Palamoun" という文がある。ここで用いられた *seten* は住むという意味である（暗い、恐ろしい、頑丈な牢獄の中で、この七年間というもの、パラモンは・・・住んでいた）。*The Knight's Tale*, 1451-1452. *The Riverside Chaucer*, Third Edition, ed. Larry D. Benson (NY: Houghton Mifflin, 1987) 45. [以下、*The Riverside Chaucer* と記す。] 邦訳チョーサー『完訳カンタベリー物語』榊井迪夫訳、上中下（岩波書店、1995）上 84. [以下、榊井訳と記す。]

たとえば、1300年から1320年にかけて制作された散文『ランスロ』(*Lancelot en prose*)のミニアチュールの一葉には、ランスロとグィネヴィアが最初の接吻を交わす有名な場面がチェストとおもわれる箱椅子のうえに設定されている(図2)。二人は、接吻をうながしたガレホルトを挟んですわり、上半身を折り曲げて接吻している。散文『ランスロ』のテキストでは、3人がチェストのうえにすわったという記述はなく、グィネヴィアはランスロと野原の木の下にすわっているときに、「ここは適切な場所ではないけれど、かれが望むならば」といいながらも接吻を交わす("... del baisier fait ele nest il mie ore liex ne tans . Et nen doutes mie . que ien sui au [s]si volentieue com il est" 263)。³¹このときかれらは木の下に直接すわったとおもわれ、ミニアチュールの右側ではその情景がふまえられているが、左側の接吻の場面はチェストを舞台としているのだ。画家は呪術的で内密な場をあらわすチェストを二人の接吻の場面として用意したのである。テキストで、グィネヴィアがランスロに「わたしたちはこの愛を秘密にしなければならない」と告げる言葉を耳にしたかのように。³²

その「秘密」の出来事が視覚的な了解としてチェストを必要としたように、チェストの箱空間は、他者を排除したプライベートな場でもあった。ランスロとグィネヴィア、そしてガレホルトは、他人の目から接吻とわからないようにあたかも相談事をしているかのように身をかがめたという。ここで、プライバシーという語のもとになった中英語の *privi* は、第一義として「秘密」を意味したことを確認しておこう。私的な空間は、チェストの場に端を発しているのである。

³¹ *The Vulgate Version of the Arthurian Romances*, ed. from Manuscripts in the British Museum by H. Oscar Sommer (8 vols. in 7, 1908-16; rpt. NY: AMS, 1969) 3. 257-264. (Translated from British Library, Lansdowne MS. 757, ff. 71vb-76rb, by Paget Toynbee in "Dante and Lancelot Romance," *Dante Studies and Researches* (London: Methuen, 1902) 34-35.) トリスタンとイゾルデをチェストのうえにすわらせて描いたミニアチュールもある。たとえば、"Tristan and Ysolt. The Love Grotto." *Roman de la poire*. c. 1260. N. French School. (Cabinet des MSS, Fonds français, bibliothèque nationale, Paris; f.5v.) Roger Sherman Loomis (in collaboration with Laura Hibbard Loomis), *Arthurian Legends in Medieval Art* (London: Oxford UP, 1938) pl. 203.

³² *The Vulgate Version of the Arthurian Romances*, 3. 263. "Or gardes que la chose soit si chelee comme il est mestiers . Car ie sui vne des dames del monde dont on a grignors biens ois . & se mes los empiroit par vous ci auroit amor laide & vilaine...."

ふれあいながらすわる—チェストの触覚空間

ところで、中世人はどのようにすわったのだろうか。写本のミニアチュールや大聖堂の彫刻などをみると、人びとはさまざまなすわり方をしていることがわかる。前出のすわるという動詞 *sitten* は、動物や蛇、鳥、昆虫にも用いられ、うづくまる、はうなどの意味ももっていたように、中世人は「気楽な、格式ばらない坐り方」をしていたらしい。³¹ しかもかれらは、隣人と身体を相接してすわっていたのである。図3は、アーサー王に聖杯探求について話す騎士たち

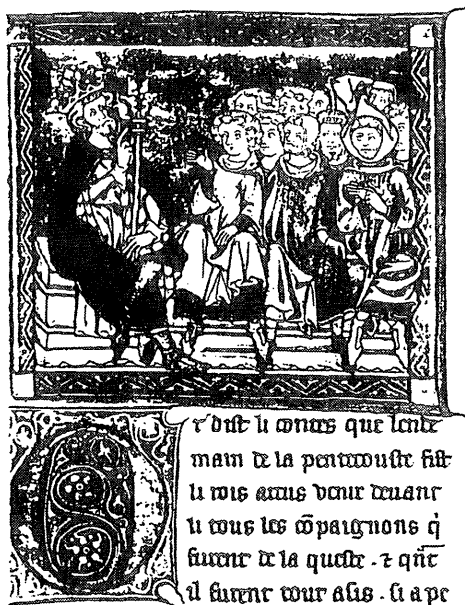


図3 アーサー王に聖杯探求について話す騎士たち(1316年頃)

John Rylands Library (マンチェスター) Fr. 1, f. 114v.

Roger Sherman Loomis (in collaboration with Laura Hibbard Loomis), *Arthurian Legends in Medieval Art* (London: Oxford UP, 1938) pl. 237.

³¹ S・ギーディオ 257. とはいえ、身ぶりや姿勢は、内なる魂のあらわれとしてとらえられたため、修道院などでは修練者の坐の姿勢に細かな注意が払われ、身体接触は禁じられていた。ジャン=クロード・シュミット『中世の身ぶり』松村剛訳(みすず書房, 1996) 147, 153-4. 聖ベルナルドゥス(1091-1153)も、「もし最初は信頼していた修道士が、歩いたり坐ったり立ったりするどこでも、あらゆる方向に目を向け、首を伸ばし、耳をそばだて始めるのをあなたが見たら、外的人間の動きで、内的な変化がわかるであろう」と坐の姿勢に注視している。

を描いた14世紀初めのミニアチュールである。王と騎士がともにすわるのはただひとつのチェストのうえであり、王に話をする騎士たちは身体をすりあわせて密集してすわっている。このように中世の絵ではしばしば身体を接しあう人びとが描かれるが、これはひとつの画面におおくをつめこもうとする中世的な画法というよりは、むしろ人びとがじっさいの生活のなかでからだをふれあわせながらすわり、あるいは立つことを習慣にしていたことを反映しているとかんがえられる。³⁴

たとえば、宮廷の宴会の場面を描いたミニアチュールには、身体を接しながら食事をする宮廷人が描かれている。³⁵ 宴会では客を二人ずつすわらせることがホストの礼儀とされたように、³⁶ 12世紀後半にクレチアン・ド・トロワが著

³⁴ S・ギーディオ 259.

³⁵ たとえば、Wolfram von Eschenbach's *Perzival*. 13C. Munich, Staatsbibliothek, Ms Germ. 19 f.49v, v50v. やロンドンの大英図書館に所蔵されている1400年頃に制作された *Lancelot du Lac*, Additional Manuscript 10293, 10294. 後者を調査したところ、両方に人びとが密集している場面が数多く描かれ、その場合顔も体つきもほとんど同じように描かれていた。たとえば10293の134r.のミニアチュールでは建物のなかに人びとが身体をすりあわせて立っており、同143r.では同じような顔としなやかな体つきの人びとがアーサー王とグィネヴィア王妃を囲んで身体をたがいに接しながら立っている。中世ではテーブルのまわりに集まってすわり食事をするというような決まった習慣はなく、立ちながら食べることも多かった。中英語には食卓につくという場合、*sitten toforen bord* (to sit at table) という言い方と並んで、*to stonden at the bord* (to serve at the table) ともいっていたことから、立って食べていたことがわかる。ただし立って食べることは、時間をかけずに食事をとることを意味した。チョーサーの『カンタベリー物語』の教区司祭の話に以下のような記述がある。

"... sparynge also, that restreyneth the delicaat ese to sitte longe at his mete and softly, wherfore some folk stonden of hir owene wyl to eten at the lasse leyser. 「慎みもまたそうです。これは食卓に長く居て心地よく過ごすような楽しい喜びを抑制することです。なぜなら、自らの意志で、時間をあまりかけずに食事をする人もいるのです。」(The Parson's Tale, 835; *The Riverside Chaucer*, 317./榊井訳、下252.)

³⁶ ジャン＝クロード・シュミット 230. Ex. "Peredur the Son of Evrawc" (*The Mabinogion, Mediaeval Welsh Romances*, trans. by Lady Charlotte Guest, with notes by Alfred Nutt (? 1902)) のなかだけでも、主人公のPeredurはほとんど横に並んですわっている。"And when he [Peredur] entered he beheld three maidens sitting on a bench, and they were all clothed alike, as became persons of high rank. And he came, and sat by them upon the bench;....(271); And Peredur went and sat down in the outer chamber of the tent, and she came and placed herself by his side. (280)

した『ペルスヴァル』でブランシュフルール姫は、城を訪問したペルスヴァルとともに広間におかれた寝台(lit)にすわる。図3のアーサー王と騎士たちの身体空間のありように差異がみとめられるように、おなじ広間で6人でひとつの座具にすわっている騎士たちにくらべ、³⁷ 姫とペルスヴァルのあいだには距離が生じているが、それは個人用の椅子に別々にすわる場合のように、「個」の単位に分割されたわけではない。チェストのうえに形成された日常の触覚空間が、公の場でも二人の身体間に限定されはするものの、寝台のうえでも必要とされたのである。ちなみに広間におかれた豪華な寝台は、チェストから派生したものだ。チェストがつくる場のように、寝台のうえでも客をひとりですわらせることはなく、主人とおなじ座の場を共有させることが中世の礼節だったのである。

ミハイール・バフチンは、中世人は「自分が、永遠に成長し再生する民衆の一員である」ことを「祝祭の広場で、カーニバルの群集の中で、あらゆる年令と地位の人の身体とふれあいながら感ずるのである」と述べたが、³⁸ これは祝祭にかぎったことではなく、日常においても人びとはそうした触覚空間を座具の周辺に形成していたのである。また、他者とふれあうのを嫌わない中世的な感覚について、ノルベルト・エリアスは「人間の体と体の上に、人間を抑制し分離して現にそびえ立っているように思われる、あの情感の目に見えない壁」がまだ発達していなかったと指摘している。「壁」とは、「他人の口とか手に触れたものに単に近づくだけですでに、今日ではよく感じられる防壁、他人のい

³⁷ *Einsi l'an mainne par la main*

jusqu'an une chanbre celee,

qui mout ert bele et longue et lee.

Sor une coute de samit

qui fu tandue sor un lit

se sont leanz andui asis.

Chevalier quatre, cinc et sis

vindrent leanz et si se sistrent

tot par tropeax et mot ne distrent, 1844-1852.

Le romans de Chrétien de Troyes. V Le conte du graal (Perceval), éditées d'après la copie de Guiot (bibl. nat. fr. 794), publiée par Félix Lecoy (Paris: Librairie Honoré Champion, Editeur, 1978).

³⁸ ミハイール・バフチン『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳（せりか書房, 1973）84.

くつかの身のこなしを単に見ただけで、またしばしば、それについて述べただけで、不快感として現われる防壁、あるいは、自分のいくつかの身のこなしが他人の視線にさらされているときなどに羞恥心として現われる防壁」である。³⁹

けれども、そうした「壁」のない分節されていない触覚的な空間が中世人の身体感覚にとっては、ギーディオンがいうように「快適」だったのだ。かれらは、内部にいながらにして外部世界とかかわり、同時にみずからと内的なつながりをもつ「ふるさと」あるいは「住まう」場をチェストという箱を手がかりに、身体的トポスのなかに確認していたのだった。神の国は手でふれることはできないが、すわるという行為によって、世界とかかわる基準であるチェストにふれ、世界に手をさしだすことができる。チェストのうえにすわり、その内部の大きな世界に包まれながら、みずからの身体をそこに位置づけているのである。

また、そのように経験される世界は、隣人にふれることによってみずからの身体もふれられるという身体連続性のなかで、共有しあいながら、あるいは身体を共鳴させながら確認される空間だった。世界と身体のかかわりは、チェストの内部と外部が反転する場で、ふれあいながらすわるといういとなみをとおして、こうした触覚的な出来事として体験されるものだったのである。

チェストの所有

チェストは財産の保管庫であったため、私有財産の所有の問題とも切り離せないが、チェストと身体の密接な関係性は身体の問題にも直結していくことになる。たとえば、チョーサーの『カンタベリー物語』(1395年頃)に登場する、5人の夫と結婚した女傑として知られるバースの女房は夫の一人にこのようにいう。

なぜお前さんは[お前さんの]金箱(cheste)の鍵をわたしから隠したりするのかい。この罰あたりめ！それはわたしの財産だよ。あんただけでなく、ほんとに！なんだって、お前さんはわが家の奥さんを阿呆扱いにしようと考えているのかい。ジェイムズ聖人と呼ばれる主にかけて申しますが、たとえお前さんが気が違ってたって、お前さんにわたしの身体と

³⁹ ノルベルト・エリアス『文明化の過程—ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷』赤井・中村・吉田訳、上下(法政大学出版局, 1977)上168-169.

わたしの財産の両方とも自由にさせはしないよ。お前さんは二つのうち、その一つを手放さなけりやならないよ。わたしを詮索したり、見張ったりしたって何の役にも立つものか。お前さんはわたしをお前の金櫃(chiste)の中に閉じ込めておきたいんだらうよ！⁴⁰

夫がチェストの鍵を隠しているのが気に入らない女房は、夫が身体と財産の両方を所有することを認めない。中世の結婚は、社会的、経済的な要求に応えた家同士の取り決めによるものがほとんどで、夫側は花嫁に、家、穀物倉、所有地、家畜、荘民、衣類、装飾品などで花嫁代を支払った。⁴¹ 夫が鍵を隠したというチェストは、「お前さんの("thy")」という断わり書きがあるところを見ると、夫のものであり、女房に花嫁代として支払われたものではなかったことが推測できるが、女房は夫によるチェストの占有を認めない。

この女房のいらだちは、チェストの鍵の存在によって増幅される。鍵のついたチェストは、だれでもかまわずにむかって蓋を開くものではない。鍵がかけられた内部の内密さは鍵を所有する夫にのみ約束されたものであり、それだけ女房の夢想は箱の内部にむかうことになり、女房は内部の次元にすでにとりつかれて(*be possessed*)しまっている。だから女房は、みずからの身体が夫のチェストのなかに閉じ込められている("locked me in thy chiste")ということばを発ってしまうのだ。このとき、女房は鍵によって箱の外部に遠ざけられているにもかかわらず、身体は完全に内部に吸引されているのである。

⁴⁰ But tel me this: why hydestow, with sorwe,

The keyes of thy cheste away fro me?

It is my good as wel as thyn, pardee!

What, wenestow make an ydiot of oure dame?

Now by that lord that called is Seint Jame,

Thou shalt nat bothe, thogh that thou were wood,

Be maister of my body and of my good;

That oon thou shalt forgo, maugree thyne yen.

What helpith it of me to enquere or spyen?

I trowe thou woldest loke me in thy chiste!

The Wife of Bath's Prologue, 308-317. (下線は筆者) *The Riverside Chaucer*, 109. 榊井訳、上20.

⁴¹ ハンス・ヴェルナー・ゲッツ『中世の日常生活』榎田・川口・山口・桑原訳(中央公論社, 1989) 48.

夫のチェストの所有にたいする女房の不満が、そのまま身体の所有の問題に移行していくのは、このような鍵のついた箱が外部をも驚愕させる未知の、しかも potential な内部を秘めているからであろう。⁴² その連想をうながしたもうひとつのものとして、所有の行為がすわる姿勢、すわる身体とわかちがたい関係性をもっていることに注意したい。

英語で所有のことを possession というが、動詞形の possess は、ラテン語の所有を意味する possidere を語源とし、本来 pots-sidere、「主人のようにすわる」という意だった。Pots (potis) は、能力のある、力のあるという意味で、英語の potential などのことばの源であり、sidere は sit、すわるという動詞である。⁴³ ラテン語の聖書にあらわれる possidere の古英語の訳語を分析した小野茂によれば、possidere の訳語のなかで sidere「すわる」という運動をふくんでいる語は、主としてイングランドのマーシア方言にみられる gesittan で、ドイツ語の占有を意味する besittan と同形の訳語や settan という派生形が用いられる場合もある。⁴⁴ 聖書以外のラテン語の書物やもともと古英語で書かれたテキストでは、gesittan よりも agan, agnian, geagnian の訳語のほうが使用されるようになっていく。⁴⁵

けれども、possidere が元来そなえていた「すわる」という行為と、すわる人物はそれにふさわしい能力をそなえているという意が消え去ったわけではない。事実、この意をひきつぎ、中英語の possessen は、人がある場所を占める (occupy) ことを意味したが、これはすわるという行為が、その場を占める、あるいはその場のものを所有するという意味から連動したものであろう。ここか

⁴² 女房がいう身体の所有は、夫の見張りから自由に解き放たれていたいとする欲求だが、ここには性的な身体的所有権も関わってくる。女房はその身体的所有をも主張する。「わたしは生きている間、夫自身の肉体を支配する力をもっています。彼がもっているものではありません。まさにこんなふうに、かの使徒様はわたしにお告げになりました。」榊井訳、中 13。使徒様というのはコリントの信徒への手紙(1 7: 3-5)に記された言葉であり、夫は妻の身体を、妻は夫の身体を所有する権利をもつというこの見解を述べたものだった。身体はたがいに所有しあうものだった。

⁴³ Ernest Klein, *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*, 2 vols. (Amsterdam: Elsevier Publishing Company, 1966-67) 1. 1222.

⁴⁴ Sigeru Ono, "Old English Verbs of Possessing," *English Historical Linguistics and Philology in Japan*, ed. by Jacek Fisiak and Akio Oizumi (Berlin & NY: Mouton de Gruyter, 1998): 297-311. 古英語の possidere の訳語について小野茂先生よりご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

⁴⁵ Sigeru Ono 301.

ら、所有の行為の支配下におかれたものを possession というようになったのだが、注目したいのは、所有の行為も、所有物そのものも、根源に坐の姿勢があることである。逆にいえば、すわるという行為によってその場が所有される、その場にあるものが所有物とみなされたといえる。

ここから、所有物を入れる箱、チェストの外部に人がすわることによって内部を所有するという連関がうかびあがってくるだろう。すわる身体は、チェストがあらわす場を外部から所有するのである。うえにみたように、あくまで場を出現させるのは、チェスト、物であり、身体はその場に外部からかかわりつつ、内部が象徴する豊かな空間の磁場に身をおいていた。この身体のトポスは、所有の行為、姿勢のうちにも経験されていたのである。身体はすわることによって場を外部から所有しながら、場の内部空間に包まれていた、場によって所有されていたといえる。

身体の中の箱

この内部と外部の反転は、身体そのものの現象でもある。このことをかんがえるうえで、中世において身体は靈魂を内部(intus)にひそめる容器であるとかんがえられたこと、そしてとりわけ魂と秘密をおさめる部位とされた胸部がチェストとよばれていたことは注目に値する。⁴⁶

チョーサーの『トロイラスとクリセイダ』(1425年頃/1385年頃)にクリセイダがこのようにいう場面がある。

わたしがどうしているかお知りになりたいならば、
その悲しみはどんな知識をもってしても記すことができず、
生きながらえてこの手紙を書くにあたって

⁴⁶ ローマ時代においては靈魂の在る場所は、身体全体へ司令をだす頭であるとされ、これがキリスト教にも受け継がれたのであるが、12世紀になると頭よりも心臓に神学者たちの関心が集まり、15世紀には、靈魂がおさまる場所が胸部とされ、そこがチェストとよばれるようになった。池上俊一は、ギョーム・ド・ロリスによる13世紀の『ばら物語』で心臓が「壁に囲まれた果樹園の中で貴婦人を愛する騎士の『鍵を掛けられた心臓』のイメージ」で描かれていることを指摘する。(『歴史としての身体--ヨーロッパ中世の深層を読む』(柏書房, 1992) 89)。この心臓のイメージと、イエスの聖なる心臓を靈魂の避難の港としてみなすキリスト教会のイメージ操作の延長線上に、方形の胸部をチェストに見立てた中世人の心性があったとみてよいだろう。じっさい、「心臓のチェスト」といういいかたもみられる。(Spec. Chr. (2) 38/15 c1450)

あらゆる悲しみが宿る chiste を知るほかはないでしょう。⁴⁷

このことばにみられるように、靈魂が入れられるチェストのなかには悲しみが宿り、また秘密がおさめられるとかがえられた。⁴⁸ つまり、収納具のチェストがあらわした内密かつ濃密な場が、身体の中にも形成されたのだった。人は、秘密の悲しみがチェストから漏れればその奴隷となり、靈魂がチェストから抜け出たときが死ぬ時だとかがえられたのである。

これまでみてきた坐の姿勢との関連からいえば、靈魂が外部にあらわれる姿勢として重んじられたのが坐位だったことは興味深い。靈魂の眠りは罪の証拠とかがえられたため、靈魂が覚醒してつねに思考する状態を維持する坐の姿勢が知性や哲学的な心性をあらわすとされた。⁴⁹ 坐位は身体をやすめ、精神的な崇高な活動に身体の機能を集中させるのにふさわしい姿勢であり、内的思考を文字や絵に投影するための長時間にわたる瞑想的な雰囲気空間にあたえる

⁴⁷ "And if yow liketh knowen of the fare
Of me, whos wo ther may no wit discryve,
I kan namore but, chiste of every care,
At wrytyng of this lettre I was on-lyve,
Troilus and Criseyde, Book V 1366-1369; *The Riverside Chaucer*, 578.

⁴⁸ たとえば、「胸は弱さと悲しみのチェスト」(Lydg.CBK 227. c.1450)「わたしの心臓は清らかではありません。わたしの胸、凄惨なチェスト」(Lydg.LOL 2.417 c.1450) チェストは心臓(heart)とならんで胸(breast)ともいいかえられる。胸もまた愛情や感情、意識、秘密の住処とかがえられており、心臓と同義でもちいられた。(OED)

ex. Layamon's *Brut*, v. 17129-31:…fwulc þing ne ifcire./ For mi gæft if bæł iwis! / þa a mire breofte if. (MS. Cott. Calig. A. ix). *Lazamons Brut: or Chronicle of Britain*, a poetical semi-Saxon paraphrase of the *Brut of Wace*, 3 vols. (London: the Society of Antiquaries of London, 1847; rpt. NY: AMS Press, 1970) 2.293-294. Chaucer, *Troilus and Criseyde*, Book IV: 795-796. "How shal youre tendre herte this sustene?/ But, herte myn, foryete this sorwe and tene..."; *The Canterbury Tales*, The Wife of Bath's Tale, III (D) 977, "Now in myn herte al hool; now is it oute. / I myghte no lenger kepe it, out of doute." III (D) 986, "Withinne his breast ful sorweful was the goost. "「秘密があなたの胸(チェスト)のなかにあるあいだは、それはたしかに城壁のなかにあるようなものです。それがあなたのチェストからでてきたときに、あなたは秘密の奴隷となるでしょう。」(Idle Instr. 1.332 c.1457)

⁴⁹ ダンテ『地獄篇』第1歌 11行参照

Arthur C. Danto, "The Seat of the Soul," *367 Chairs* (NY: Harry N. Abrams, 1988) 10.

姿態でもあった。

このような身体の外見は、内部にある靈魂のあらわれとして解釈された。靈魂に救済の道を開くためには、身体をとおして、身ぶりや姿勢のうちに、徳をつまなければならない。容器を正すことによって、靈魂に方向性をあたえることができるのだ。それゆえ、身体表面の操作が必要となるのだが、靈魂を身体に外化するというその操作は、同時に内化のプロセスでもある。そのプロセスにおいて、身体に内と外の区分が生じて、身体が境界づけられ、いわば箱化することになる。とすれば、身体は、内部／外部のあいだの概念操作に支配された表面におおわれているのであり、そのような身体は、個人固有のもの (property) として所有されたのではなかったといえる。身体は外部からはたらしきかけて内部を所有し、同時に内部が外化して外部を所有するという、チェストにみた所有の関係が身体という現象にも起きているのである。

箱のなかの身体

靈魂が身体のチェストから抜け出た亡骸は、柩のなかに入れられ釘うたれたが、この箱のこともまたチェストといった。英語で柩に coffin が用いられるようになるのは17世紀になってのことであり、それ以前は9世紀からチェストが使用された。チェストと死の関連は、古代ギリシアにまでさかのぼるが、わたしたちは先にそれらの容器が生命の誕生のメタファーをも有していることをすでにみてきた。チェストは、最初の、そして最後の空間として身体を包みこむものなのだ。

前述の『カンタベリー物語』のバースの女房の道楽者だったという4人目の夫はいま墓の cheste におさまっているという。また、免罪符売りの話に登場する貧しい老人が、チェストとみずからの死をひきかえにしたいというのも、チェストと死の連想が働いたからだろう。老人は朝晩大地を杖で叩きながらこのようにいう。「いつになったらわたしの老骨に休息がやって来るんでしょうか。お母さん、わたしはわたしの寝部屋に長いことあるわたしの cheste と、そうです、埋葬のときにわたしを包みこんでくれるバズ織布とを取り換えたいんです！」⁵⁰

⁵⁰ …'Leeve mooder, leet me in!

Lo how I vanysshe, flessh, and blood, and skyn!

Allas, whan shul my bones been at reste?

この老人にはみずから柩を用意できる余裕はない。それでも唯一の財産だったろうチェストをさしだして、埋葬用の布を懇願する。その布は、老人がかつて隣人とチェストの場で体験したであろう触覚的な出来事を、痩せ衰えて息絶えようとする身体によびさましてくれるはずである。布に包まれるその感触のなかに、かれの身体はみずからの内部と外部のせめぎあいに最終的な折り合いをみつけようとしているのではないか。

いっぽう、聖なる人の亡骸はチェストにおさめられることによって、さらなる聖性を帯びた。たとえば、イタリアのアッシジの聖フランチェスコ大聖堂の地下には、聖フランチェスコの遺体がおさめられた柩が安置され、今日でも人びとはその柩にろうそくを灯し折りを捧げている。柩のみならず、聖フランチェスコの身体の一部もまた、聖遺物箱におさめられ、信仰をあつめてきた。

このような信仰は、12世紀以降顕著になった完全なる身体の復活を贖罪として願う神学上の主張にむすびついたものだった。キリストが復活したように、身体の各部位がどこもその固有性をうしなうことなく、ひとつの実体にもどることが最終的な贖罪であると信じられ、この願いが聖人の身体部位を信仰する聖遺物信仰を助長した。14世紀には、reliquaries でクリスタルのケースに入れて聖遺物が展示されるようになり、一般人も聖人の身体の一部や骨のかけらを目にすることができるようになった。⁵¹「神様の尊い心臓にかけて」とか「神様の爪にかけて」「神様の腕にかけて」などといういいまわしがみられるようになるのも、聖遺物信仰が一般化したあらわれとみることができる。⁵²

Allas, whan shul my bones been at reste?
 Mooder, with yow wolde I chaunge my cheste
 That in my chambre longe tyme hath be,
 Ye, for an heyre clowt to wrappe me!

The Pardoner's Tale, 731-736; *The Riverside Chaucer*, 199. 榎井訳、中 317.

オクスフォードの学僧も、かれが語ろうとする話を学んだイタリアの学者はいまはもう cheste の中に釘で打たれておさめられている (nayed in his cheste) という。(The Clerk's Prologue, 29-30; *The Riverside Chaucer*, 137. 榎井訳、中 107)

⁵¹ Caroline Walker Brynum, *Fragmentation and Redemption: Essays on Gender and the Human Body in Medieval Religion* (NY: Zone Books, 1991) 271.

⁵² たとえば、Chaucer, *The Canterbury Tales*. The Pardoner's Tale. "By Goddes precious herte" (651) "By his nayles (651)," "By goddes armes" (654), & "Goddes digne bones!" (695). *The Riverside Chaucer*, 198-199.

心臓、爪、腕、足、髪、骨、乳房・・・身体は切りぎざまれて箱におさめられた。箱、それも小箱のほうが内部の呪術性、内密性を豊かにしたように、身体も分割されればされるほど「多くの奇蹟的統合」をもたらすことになる。⁵³

この断片が全体性をイメージさせるという認識の背景には、キリスト教のシンボリックな解釈とならんで、日常生活のなかでは薄暗がりのなかをうごめいていた中世人の身体がみられるテキストとしては成熟していなかったという物理的な、あるいは視覚的な事象があったこともつけくわえておかなければならない。中世の都市の大聖堂はびっしり立ち並ぶ家屋でかこまれており、家並みのうえに尖塔がのぞくほかは全容をあらわすことはめったになく、むしろ内部の彫刻や周囲の細部を順にみていく建築物だった。おなじように、暗がりにある人間の身体も、少なくとも、ある距離をとっての全身像は問題にならず、見られるとしてもそれは目、鼻、口、手、足、といった部位だったのである。⁵⁴

このような生活のなかの身体像に、造形表現の嗜好や身体部位を強調する服飾の特徴などがさらに重なりあって、部分で全体を志向するという身体イメージ、身体のかげらをひとつのまとまりとしてつなぎあわせる身体イメージが提出されたといえる。けれども、身体のかげらが想像によって、あるいは全体性への憧れによって、もっといえば「フェティッシュ」な欲望によって統合されるそうしたイメージの継ぎ目は、いかにもあやうい。

小箱のなかにひとつひとつ厳かにおさめられた身体のかげらは、いっぼうでこのような脆弱な身体性をうったえながら、もういっぼうで身体の一統性を喚起する。ジグソーパズルのただひとつの片から全体の絵を想像するかのよう、ほかの部位の情報をもたずに、たとえば腕だけを目にして立ちあげる全体的な身体イメージは、ファントムのような消え入ってしまいそうな外縁をかううじて維持するにすぎない。身体断片をおさめる箱は、そうした簡単に碎けてしまいかねないイメージとしての身体を拵づけているのである。身体のかげらを包みこむ箱があってはじめて、そこに永遠なる身体イメージが生まれ、それが

⁵³ 池上俊一『歴史としての身体--ヨーロッパ中世の深層を読む』（柏書房、1992）70。

⁵⁴ 野村雅一『しぐさの世界—身体表現の民族学』（日本放送出版協会、1983）174-178。

このような身体イメージは、チョーサーの身体描写にも反映されている。たとえば、家扶は娘の身体をつぎのように描写する。「娘さんのほうはずんぐりして、とても栄養がよく、鼻は平べったく、目はガラス玉のように涼しい青色で、お尻は大きく、丸くて高い胸をしていました。だが、本当のところとても美しい髪の毛をしていました」榊井訳、上177。

外部にあふれでて場を聖化するのだ。

身体の部分箱の内部にありながら、遠くの世界をそのかけらのうちにひきよせ、それを外部に投射する。巡礼は、箱の内部から発せられるアウラに包まれ、神の国を経験したのである。その箱は、巡礼者たちの旅の終着の場所となった。ふたたびグレーヴィチによれば、中世ではダンテや聖杯探求に出発した円卓の騎士のように、トポグラフィ的移动ないし運動によって人間の内的状況の変容が実現された。⁵⁵ 聖人は天国に昇り、巡礼者は聖地にむかい、罪人は地獄に落ちた。聖人が地上に遺した身体をおさめた箱は、旅してきた者の疲れた身体と昂揚した精神の両方を迎え入れ、癒し、救済し、そして身体の復活への希望を箱の底にみせるのである。

おわりに

19世紀のヨーロッパでも喪失した身体の全体性の回復がとなえられたが、その主張の一環として、中世を黄金時代として理想化し、中世的伝統をよみがえらせようとする medievalism がおこった。中世に回帰しようとする試みが、「人間の豊かな情感や忠誠心を裏り多き伝統や慣習と結び合わせることによって成立する有機的な社会構造の中へ、再び人間を位置づけんとするためのひとつの方策」となったのであった。⁵⁶

この medievalism に感化された芸術家はおおいが、そのひとりにラファエル前派兄弟団というイギリスの芸術家グループの中心人物で、詩人でもあり画家でもあった D・G・ロセッティがいる。ロセッティは1850年代に中世を舞台とした絵画や詩を制作し、チェスト構造をもつ椅子を好んで作品のなかに描いた。『クリスマス・キャロル』(1857-58)で小型のピアノを弾く女がすわる椅子も、『七塔の調べ』(1857)で弦をつまびく女がすわる椅子も、チェストから発達した角形の椅子である。

さらに興味深いのは、ロセッティが、パオロとフランチェスカの接吻の舞台としてチェストを選んだことである(図4)。ダンテの『地獄篇』第五歌にあるように、パオロとフランチェスカはランスロとギネヴィアの最初の口づけの

⁵⁵ アーロン・グレーヴィチ 104-105.

⁵⁶ Alice Chandler, *A Dream of Order: The Medieval Ideal in Nineteenth-Century English Literature* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1970); 邦訳慶應義塾大学高宮研究会『中世を夢みた人々—イギリス中世主義の系譜』(研究社出版, 1994) 6-7.



図4 Dante Gabriel Rossetti, *Paolo and Francesca da Rimini*(1855)
水彩, 24.8 × 44.5cm, テイト・ギャラリー, ロンドン

場面を読み、接吻を交わすのだが、ロセッティはその二人をチェストにすわらせているのである。⁵⁷ また、ランスロがアーサー王亡き後、尼僧となったグィネヴィアに会いにいき、最後の接吻を求める場面を描いた『アーサーの墓』(1855)では、ロセッティはそこにはないはずのアーサーの柩、つまりチェストを、恋人たちの別れの場面に挿入した。このチェストの存在によって、「出来事」のドラマ性はいやがおうにも高まり、ランスロと接吻を拒絶したグィネヴィアのあいだの緊張が画面全体をはしる。

中世の世界を表徴する箱、チェストは、宇宙からも、神からも、そして隣人からもひきはなされた19世紀の人びとの身体を、グレーヴィチのいう「ふるさと」に、あるいは「住まう」場所にふたたび位置づける手がかりをさしだしたのかもしれない。ベンヤミンが記した19世紀のブルジョワのなにもかもケースに入れてしまうという箱にたいする偏愛も、世界と身体がかかわる手がかりを探した試みのひとつの結果だった。⁵⁸ けれどもかれらにとっての世界は、中世

⁵⁷ ロセッティにおけるランスロットとグィネヴィア、パオロとフランチェスカのロづけの系譜については、Eriko Yamaguchi, "Osculatory Obsession: Rossetti's Treatment of Arthurian and Dantesque Subjects in 1855," *Studies in Medieval English Language and Literature* (日本中世英語英文学会), 6 (1991): 37-58.

⁵⁸ ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論 V ブルジョワジーの夢』今村他訳(岩波書店, 1995) 163, 175.

人が箱の内部にみた不可視の、永遠なる外部世界につらなっていく無限の空間ではなく、はるかなるもの、遠く過ぎ去ったものを室内に寄せ集めて、封じこめた世界なのであった。あたかも「世界劇場のボックス」⁵⁹の様相をみせたかれらの家は箱であふれかえったが、その箱は個人の身体の「痕跡」を刻印するだけで、他者と共鳴しあう身体を包みこむような容器ではなくなっていた。

外側から境界づけられるのではなく、内部に包まれながら同時に世界とかかわりつつ生きる。チェストは、このような身体的場のなかに、中世の人びとを位置づけた。かれらはチェストにすわりながら、世界のなかに「住まう」場所を所有したのである。

* 本稿は、第15回日本中世英語英文学会全国大会(1999年12月11～12日、於駒沢大学)で口頭発表した原稿の一部をとりこんだものである。当日貴重なご指摘、ご教示を賜った方々に感謝申しあげる。なお本研究は文部省科学研究費奨励研究(A)(平成10～11年度)の助成をうけた。

⁵⁹ ヴェルター・ベンヤミン『ボードレール』ベンヤミン著作集6(晶文社, 1975) 21.